

# 栄山(3)遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年2月

青森県教育委員会



# 栄山(3)遺跡

-東北縦貫自動車道八戸線(青森~青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-

2001年2月

青森県教育委員会





栄山(3)遺跡近景



栄山(3)遺跡全景



# 序

青森市西部に広がる丘陵地には、国の特別史跡三内丸山遺跡をはじめ、多数の遺跡が確認されています。

近年、発掘調査が行われたものでも、熊沢遺跡、岩渡小谷(4)遺跡、三内丸山(6)遺跡、安田(2)遺跡、朝日山(2)遺跡などが挙げられます。

これらの遺跡と近接する栄山(1)～(4)遺跡については、これまで発掘調査が行われていませんでしたが、平成11年度に、東北縦貫自動車道八戸線建設事業の実施に伴い、日本道路公団から委託を受けて当センターが、栄山(3)遺跡の一部を発掘調査しました。

調査の結果、縄文時代、平安時代の住居跡や土器、石器が出土し、近接する遺跡との関連を検討したり、地域の歴史を知る上で貴重な資料が得られました。

この発掘成果が、広く文化財の保護と研究に活用され、また、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施と報告書作成にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に対しまして、厚く御礼を申しあげます。

平成13年2月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫



## 例　　言

- 1 本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴い平成11年度に実施した青森市栄山(3)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号01213として登録されている。
- 3 執筆者の氏名は各節末に記してある。
- 4 資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。  
石器の石質鑑定　　県立八戸南高等学校教諭 佐々木　辰雄
- 5 本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、国土地理院発行の2.5万分の1地形図を複写したものである。
- 6 掘団の縮尺は、図ごとにスケールを付した。
- 7 遺物写真的縮尺は不統一である。
- 8 堆積土の色及び土器の色については『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1993）を用いた。堆積土中の混入物の大きさについては便宜的に次のとおり表記し、それ以外のものは適宜形状と大きさを記した。  
粒状のもの  
「粒」=粒径2mm以下のもの、「中粒」=2～5mm程度のもの、「大粒」=5～10mm程度のもの  
塊状のもの  
「小塊」=粒径10mm以下のもの、「中塊」=10～20mm程度のもの、「大塊」=20～50mm程度のもの
- 9 本稿で使用した遺構の略号はS I=竪穴住居跡、S K=土坑とした。
- 10 引用文献については、第4章の後に収めた。
- 11 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等は、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。



## 目 次

口絵

序

例言

目次

挿図目次・表目次・写真図版目次

第 1 章 発掘調査の概要.....	1
第 1 節 調査要項.....	1
第 2 節 調査の方法.....	2
第 3 節 調査の経過.....	2
第 2 章 遺跡の環境.....	
第 1 節 遺跡の環境.....	3
第 2 節 周辺の遺跡.....	3
第 3 章 遺構と遺物.....	7
第 1 節 概要.....	7
第 2 節 検出遺構と遺構内出土遺物.....	7
第 3 節 遺構外出土遺物.....	19
1 土器.....	19
2 石器.....	20
第 4 章 考察とまとめ.....	29
引用・参考文献.....	30
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

図 1 遺跡の位置と周辺の遺跡	6	図 9 遺構内出土遺物 (SI-04、SK-01・02)	17
図 2 遺構配置図	8	図10 遺構内出土遺物 (SK-03・04)	18
図 3 第1号竪穴住居跡	11	図11 遺構外出土土器 (1)	21
図 4 第2～4号竪穴住居跡	12	図12 遺構外出土土器 (2)	22
図 5 第1～6号土坑	13	図13 遺構外出土土器 (3)	23
図 6 遺構内出土遺物 (SI-01～03)	14	図14 遺構外出土石器 (1)	24
図 7 遺構内出土遺物 (SI-03)	15	図15 遺構外出土石器 (2)	25
図 8 遺構内出土遺物 (SI-03石器)	16		

## 表目次

表 1 周辺の遺跡	4	表 4 遺構外出土繩文土器	27
表 2 遺構内出土繩文土器	26	表 5 遺構外出土石器	28
表 3 遺構内出土石器	26	表 6 遺構内出土土器 (平安時代)	28

## 写真図版目次

口絵上 栄山(3)遺跡近景	
口絵下 栄山(3)遺跡全景	
写真 1 空中写真 (1)	写真 6 遺構内出土遺物 (1)
写真 2 空中写真 (2)	写真 7 遺構内出土遺物 (2)
写真 3 遺構写真 (1)	写真 8 遺構外出土土器 (1)
写真 4 遺構写真 (2)	写真 9 遺構外出土土器 (2)
写真 5 遺構写真 (3)	写真10 遺構外出土石器

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

青森市における東北縦貫自動車道八戸線建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する栄山(3)遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

### 2 発掘調査期間 平成11年9月20日から平成11年10月29日まで

### 3 遺跡名及び所在地 栄山(3)遺跡（県遺跡番号01213）

青森市細越字栄山

### 4 調査対象面積 1,500m<sup>2</sup>

### 5 調査委託者 日本道路公団

### 6 調査受諾者 青森県教育委員会

### 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関 青森市教育委員会

### 9 調査参加者

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員 逸藤 正夫 青森市教育委員会埋蔵文化財対策室室長（考古学）

調査員 工藤 一彌 県総合学校教育センター指導主事（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島 邦夫

次長（調査第一課長兼務） 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫（現工業振興課課長補佐）

調査第一課

文化財保護主査 太田原 潤

文化財保護主事 斎藤由美子

調査補助員 西方 敏子、中村 敦子

森川真佐子、神 健太郎

## 第2節 調査の方法

栄山(3)遺跡の発掘調査におけるグリッドは、平面直角座標第X系に基づいた4mメッシュの方眼とした。X=88200、Y=-10100を基点とし、東から西に向けて4m毎に0から順に算用数字を、南から北に向けて4m毎に大文字のアルファベットを配した。グリッド名は、該当する4mメッシュの南東角の記号をアルファベット、数字の順の組み合わせで読むこととし、A-05グリッド、F-21グリッドのごとく呼称した。

遺構検山は隨時行い、発見順に遺構名を付し、原則として1/20で実測図を作成した。遺構以外の出土遺物の取り上げは、グリッド単位で行った。

調査にあたっては、土層の堆積状況を観察するため適宜セクションベルトを設定し、土層注記は『標準土色帖』を用いた。土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を付した。

写真撮影は適宜行うこととし、カラーリバーサル、ネガカラー、モノクロームの各種類のフィルムを使用した。

(太田原 潤)

## 第3節 調査の経過

今回の調査は東北縦貫自動車道八戸線建設事業に伴う発掘調査であるが、路線上には本遺跡以外にも複数の遺跡が点在している。谷を挟んで西側に隣接する安田(2)遺跡は、本遺跡に先行して調査が実施されており、その東端部においても遺構、遺物が確認されている。

本遺跡の発掘調査は平成11年9月20日に着手した。表土除去を先行させながら遺構の検出、精査を行い、遺構外の遺物にも留意した。

遺跡の遺存状態は調査区東半においては比較的良好なものであったが、北側及び西側は大きく削平されていた。

調査は遺構が分布する遺跡の東側から順次進めることとし、10月下旬までに遺構確認および精査を終え、10月26日に空中写真撮影を実施した。その後全測図の作成、危険個所の埋め戻し等を行い、10月29日までに全ての作業を終了した。

(太田原 潤)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の環境

栄山(3)遺跡は青森市西部に広がる丘陵地の北東端付近に位置する。丘陵地一帯には大小の谷が発達し、本遺跡の東西にもそうした谷が南北に開析している。今回の調査区は南北に長い遺跡の北端にあたり、標高は約25mである。

調査区の現状は山林であったが、北側には国道7号線環状バイパス、西側には貯水池、東側には水田、作業小屋がある。それらの影響も少なくなく、調査区北側はバイパスと並行し貯水池につながるボックス型の排水管埋設により既に掘削を受けていた。また、東側も作業小屋建設に伴う整地等により大きく削平されていた。これらの区域では一般的な遺構は遺存していないものと思われた。

こうした大深度の削平は調査区の周辺部に対するものであったが、内部も程度の差こそあれ、ほぼ全域にわたって削平されていた。標高の高い部分ほど大きく削平され、低い部分は土盛りされていた。上盛りされた部分も旧地表面の上にそのまま土盛りしたのではなく、ある程度削平したのちにあらためて土盛りしたようである。そのため、標高の高い調査区中央付近の遺構、遺物の遺存状態は極めて悪いものとなっている。もともと標高が低い調査区東南部は、削平の影響はあるものの遺構は辛うじて残っていた。黒色土の残存状況も悪く、確認された遺構外出土遺物は本来の位置から離れたものが大半と思われる。

(太田原 潤)

### 第2節 周辺の遺跡

栄山(3)遺跡をのせる丘陵上には多数の遺跡が分布する。以下、本遺跡に関連する時期を中心に周辺の遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡は前期から後期にかけてのものが多い。早期、晚期のものは少なく、本遺跡の出土遺物の時期と共通する。前期では本遺跡の西方約3kmに位置する熊沢遺跡、三内丸山遺跡が代表的な遺跡である。熊沢遺跡では1975~76年度の調査で円筒下層b式期の集落跡が検出され、捨て場から大量の遺物が出土した（青森県教育委員会1978）。同遺跡では1997年度の発掘調査でも良好な資料が出土し（青森市教育委員会2000）、隣接地の岩渡小谷(4)遺跡でも2000年度の調査で同期の集落跡が検出されている（青森県埋蔵文化財調査センター2000）。

縄文時代中期の遺跡としては三内丸山遺跡、三内沢部遺跡、近野遺跡などがある。三内丸山遺跡は本遺跡の北西約2kmに位置し、膨大な遺構、遺物が出土している。その記録は江戸時代の菅江真澄によるものを嚆矢とするが、1976年度の発掘調査で二列に連なる土坑墓群が検出されて注目された（青森県教育委員会1977）。1992年度から開始された野球場建設に伴う発掘調査成果を契機に遺跡の保存が決定したが、それと前後して刊行された著作物も数多い。発掘調査報告書も1993年以来毎年刊行されている。近野遺跡は中期後半の大型住居跡が検出された遺跡としても著名である（青森県教育委員

会1997他)。

绳文時代後期の遺跡には三内丸山(6)遺跡、近野遺跡などがある。前者は本遺跡の北西約0.7kmに位置し、本遺跡と同じ調査原因の遺跡であるが、1997~99年度の調査で足形付土版、熊形土製品、木製品などが出土して話題となった(青森県教育委員会1999、2000)。後者では十腰内Ⅰ式期の良好な資料が得られている(青森県教育委員会1975、77)。

本遺跡の東南に隣接する細越館遺跡からは5世紀頃のものと推定される土師器が出土している。県内における土師器使用の初源を考える上でも貴重な資料と思われ、本遺跡でも関連遺物の有無が注目されるところであったが、今回の調査では検出できなかった。

平安時代の遺跡も多く、三内丸山遺跡、近野遺跡でも平安時代の集落が確認されている。本遺跡の西側に隣接し、同じ調査原因で調査された安田(2)遺跡からも多数の住居跡が検出されている。本遺跡南方約2kmの朝日山(2)遺跡の平成12年度調査では、唐式鏡「伯牙彈琴鏡」が出土した。集落跡からの出土は類例がなく、この地域における平安時代の集落の性格を考える上で興味深い(青森県埋蔵文化財調査センター-2000)。

(太田原 潤・土岐 耕司)

表1 周辺の遺跡(1)

番号	遺跡名	時期	著者または発行者	刊行年	報告書等
1	栄山(3)	縄文、弥生、平安	青森県教育委員会	2001	栄山(3)遺跡(本書)
2	熊沢	縄文(早~後)	青森市教育委員会	2000	熊沢遺跡
			青森県教育委員会	1978	熊沢遺跡
3	岩渡小谷(1)	縄文・平安			
4	岩渡小谷(2)	縄文(前~晩)、平安	青森県教育委員会	2001	岩渡小谷(2)遺跡(印刷物)
5	岩渡小谷(3)	縄文(中)	青森県教育委員会	2000	平成12年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告書会資料
6	岩渡小谷(4)	縄文(前~晩)	青森県教育委員会	2000	平成12年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告書会資料
7	三内雪園	縄文(前・中)	青森市教育委員会	1962	三内雪園遺跡調査概報
8	三内沢部(1)	縄文(早~後)、平安	青森県教育委員会	1978	三内沢部遺跡発掘調査報告書
9	三内	縄文(前~後)、平安	青森県教育委員会	1978	青森市三内遺跡
10	小三内	縄文(前~後)、平安	青森市教育委員会	1994	小三内遺跡発掘調査報告書
			青森県教育委員会	1994	三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書
11	三内丸山	縄文(前~後)、平安	青森県教育委員会	1970	三内丸山遺跡調査概報
			青森市教育委員会	1988	三内丸山(1)遺跡発掘調査報告書
			青森市教育委員会	1993	三内丸山(2)遺跡発掘調査概報
			青森市教育委員会	1994	三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書
			青森県教育委員会	1996	三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書
			青森県教育委員会	1977	近野遺跡発掘調査報告書(III)・三内丸山(II)遺跡発掘調査報告書
			青森県教育委員会	1979	近野遺跡発掘調査報告書(IV)
			青森県教育委員会	1994	三内丸山(2)遺跡Ⅱ
			青森県教育委員会	1994	三内丸山(2)遺跡Ⅲ
			青森県教育委員会	1995	三内丸山(2)遺跡Ⅳ
			青森県教育委員会	1996	三内丸山遺跡V
			青森県教育委員会	1996	三内丸山遺跡VI
			青森県教育委員会	1997	三内丸山遺跡VII

表1 周辺の遺跡（2）

番号	遺跡名	時期	著者または発行者	刊行年	報告書等
			青森県教育委員会	1997	三内丸山遺跡調査報告書
			青森県教育委員会	1998	三内丸山遺跡Ⅳ
			青森県教育委員会	1998	三内丸山遺跡X
			青森県教育委員会	1998	三内丸山遺跡X I
			青森県教育委員会	1998	三内丸山遺跡X II
			青森県教育委員会	1999	三内丸山遺跡X III
			青森県教育委員会	2000	三内丸山遺跡X IV
			青森県教育委員会	2000	三内丸山遺跡X V
			青森県教育委員会	2000	三内丸山遺跡X VI
			青森県教育委員会	2000	三内丸山遺跡X VII
12	三内丸山（3）	平安			
13	三内丸山（4）	縄文（前・中）、平安			
14	三内丸山（5）	縄文（中・晩）	青森県教育委員会	1999	三内丸山（5）遺跡
15	三内丸山（6）	縄文（中・後）	青森県教育委員会	1999	三内丸山（6）遺跡I
			青森県教育委員会	2000	三内丸山（6）遺跡II
16	安田（2）	縄文（前・後）、弥生、平安	青森県教育委員会	1999	安田（2）遺跡
17	近野	縄文（前～晩）、平安	青森県教育委員会	1974	近野遺跡（1）発掘調査報告書
			青森県教育委員会	1975	近野遺跡発掘調査報告書（II）
			青森県教育委員会	1977	近野遺跡発掘調査報告書（III）・三内丸山（II）遺跡発掘調査報告書
			青森県教育委員会	1979	近野遺跡発掘調査報告書（IV）
			青森県教育委員会	1997	近野遺跡V
18	安田近野（1）	縄文（前～後）、平安			
19	安田（1）	縄文（前）			
20	細越館	平安	北林八洲晴	1971	「津軽半島における推文土器の新資料」『北海道考古学』
21	栄山（1）	平安			
22	栄山（2）	縄文、平安			
23	栄山（4）	平安			
24	細越	縄文（晩）、平安	青森県教育委員会	1979	細越遺跡
25	朝日山	縄文、平安、中世	青森県教育委員会	1984	朝日山遺跡
			青森県教育委員会	1993	朝日山遺跡II
			青森県教育委員会	1994	朝日山遺跡III
			青森県教育委員会	1995	朝日山（3）遺跡
26	朝日山（2）	縄文、平安	青森県教育委員会	1993	朝日山遺跡II
			青森県教育委員会	1994	朝日山遺跡III
			青森県教育委員会	2001	朝日山（2）遺跡（印刷中）
27	朝日山（3）	縄文、平安	青森県教育委員会	1993	朝日山遺跡II
			青森県教育委員会	1994	朝日山遺跡III
			青森県教育委員会	1995	朝日山（3）遺跡
			青森県教育委員会	1997	朝日山（3）遺跡



図1 遺跡の位置と周辺の遺跡 ( $S = 1:25,000$ )

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 概要

栄山(3)遺跡で確認された遺構は、竪穴住居跡状遺構4軒、土坑6基である。竪穴住居跡の遺存状態は悪く、時期は必ずしも明確ではないものも含まれるが、1軒は平安時代、その他は縄文時代のものと思われる。土坑のうちの1基は縄文時代の円形落し穴の可能性が考えられるもので、底面に棒杭の痕跡状の小穴が確認された。

出土した遺物は縄文時代の土器、石器、平安時代の土師器等である。縄文時代の土器はいずれも小片のみであるが、前期から後期にかけてのものがある。

栄山(3)遺跡は舌状の丘陵地の先端に位置する。今回の調査区はその中でも最も北端にあたり、元来起伏のある地形であったと思われるが、調査開始以前に既に高い部分は削られ、低い部分は土盛りされていたようである。従って、遺構、遺物の残存状況は悪く、遺構は削平され、遺物は本来的な位置からは離れたものが大半であった。

隣接する栄山小学校付近でかつて古式土師器が採集されていたため、本遺跡もその点に留意して調査を進めたが、今回の調査では関連する遺構、遺物は確認できなかった。

(太田原 潤)

### 第2節 検出遺構と遺構内出土遺物

#### 第1号竪穴住居跡（図3・6）

【位置】 I-13グリッド付近で確認されている。確認面の標高は約20.7mである。

【平面形】 調査区北東端に位置し、北側、東側、上部が削平されているため、本来的な形態は不明である。重複はない。

【断面形】 遺存状態は悪いが、底面は比較的平坦で、残存している壁は緩く外傾して立ち上がる。

【規模】 削平のため、本来的な大きさは不明である。

【堆積土】 自然堆積と思われる。

【遺物】 縄文時代後期末葉の土器片が3点、横型の石匙が1点出土している。1には磨消縄文の地文上に玉抱三叉文が描出される。2は焼成堅織で内面は研磨されている。

【時期】 縄文時代後期末葉の可能性が考えられる。

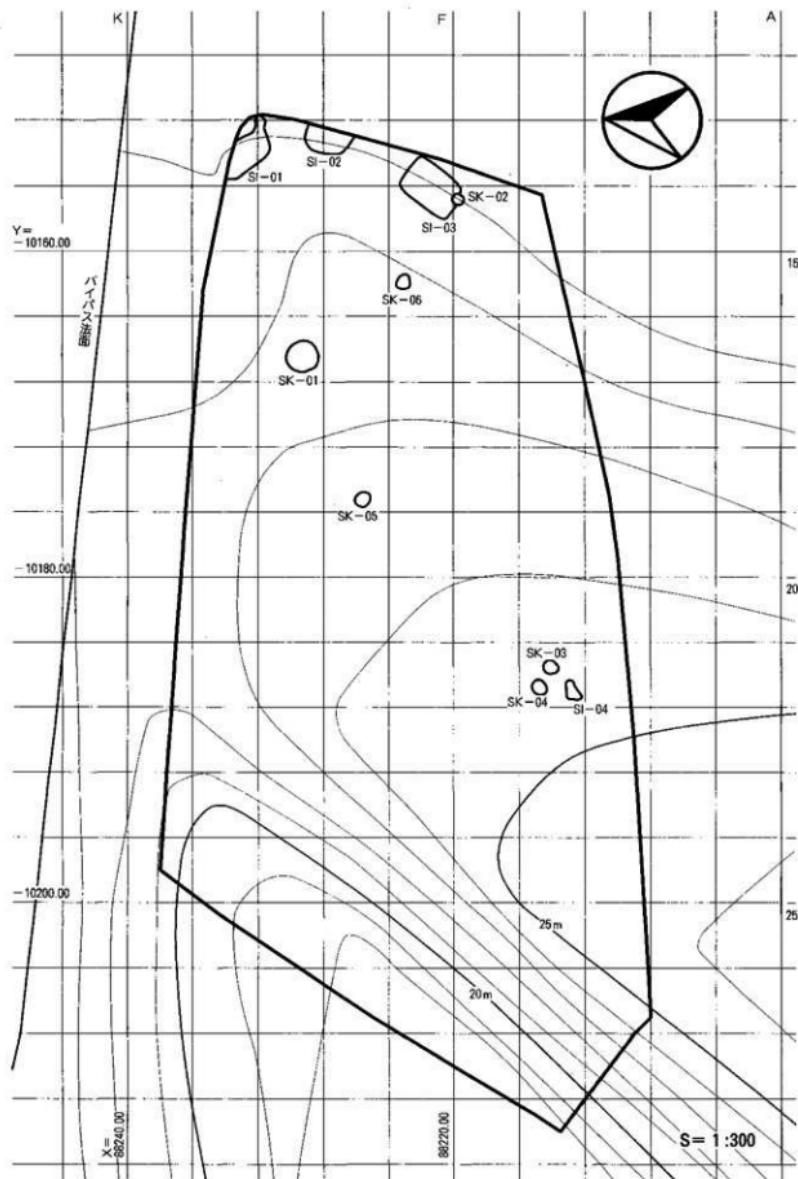
#### 第2号竪穴住居跡（図4・6）

【位置】 G-H-13グリッドで確認されている。確認面の標高は約21.5mである。

【平面形】 調査区東端に位置し、東側ほぼ半分は削平されているため全体は検出されていないが、隅丸方形または円形に近い形態になるものと思われる。重複はない。

【断面形】 底面は比較的平坦で、残存している壁は外傾して立ち上がる。

【規模】 確認できた範囲での軸長は約260cm、深さは16cmである。



[堆積土] 自然堆積と思われる。

[遺物] 4～6は同一個体で、胸部最大径付近が丸くなる注口土器と思われる。口縁部と口頸部曲面下に羽状繩文を巡らし、その上に沈線が施文される。口唇上に刻みを有した突起をもつ。欠損しているので断言はできないが4単位になるものと推定される。胎土には径2mm程度以下の砂粒が混入されている。

[時期] 繩文時代後期末葉と思われる。

### 第3号竪穴住居跡（図4・6～8）

[位置] F-13～14グリッド付近で確認されている。確認面の標高は約21.3mである。

[平面形] 圓丸長方形である。第2号土坑と重複しているが、本住居跡の方が新しい。ほぼ中央部に床面から10cm程の掘り込みがある。炉の可能性も考えられるが焼上は含まない。それに隣接して柱穴状の小穴が2基確認されている。

[断面形] 底面は比較的平坦で、壁は緩く外傾して立ち上がる。

[規模] 確認面での大きさは長軸370×短軸244×深さ35cmである。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[遺物] 繩文時代前期中葉の土器片、石器が出土している。殆どが円筒下層a・b式期のものと思われる。胸部に複節の斜繩文を施すものや、胎土に繊維・砂粒が混入されるものが多くみられる。8は器厚があり、かなり外傾しているため、浅鉢の可能性がある。内面には手指による調整痕もみられる。9・11の器形が胸部から口縁部にかけて真っ直ぐ立ちあがるのに対し、10は口縁部文様帶を区画する頸部付近から外反する。12は剥落した貼付部分で、指頭サイズの丸い刺突が連続する箇所がみられる。

石器は30が磨製石斧の欠損品、31・32が叩き石、28が使用痕ある剥片、29は磨製石斧製作作用の擦りきり具の可能性が考えられる石器である。

[時期] 出土土器から繩文時代前期中葉と考えられる。

### 第4号竪穴住居跡（図4・9）

[位置] D-21グリッドで確認されている。確認面の標高は約24.8mである。調査区内で最も標高が高い場所に位置する。

[平面形] ほとんど削平され、全体の形状は不明である。カマドの底面だけが残存したようである。隣接する第3号土坑は、本住居跡に付随したものであった可能性も考えられる。

[断面形] 床面もほとんど残存していないため形状は不明である。

[規模] 不明である。

[堆積土] カマド以外の堆積土は残存していない。

[遺物] 土師器壺、磁石等が出土している。35は繊維痕の残る土製品である。カマドの構築材か何らかの施設の炉壁である可能性が考えられる。

[時期] 平安時代のものと思われる。

### 第1号土坑（図5・9）

[位置] 調査区北東斜面のH-16グリッドで確認されている。確認面の標高は約22.3mである。

[平面形] ややいびつな円形である。重複は無い。

[断面形] 平坦面はほとんどなく、最深部から外傾しながら徐々に立ち上がる。

[規模] 確認面での大きさは径180×深さ36cmである。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[遺物] 胎土に繊維が混入された胸部破片が1点出土した。外面には炭化物が付着している。縄文時代前期のものと思われる。

[時期] 出土遺物から縄文時代前期のものと考えることもできるが、本土坑に本来的に伴った遺物ではない可能性も残る。

#### 第2号土坑(図5・9)

[位置] E-14グリッドで第3号竪穴住居跡の下位から確認されている。確認面の標高は約21.2mである。調査区中央付近の丘陵頂部から、調査区東側に開析する谷に向けての斜面に位置する。

[平面形] 不整な円形である。第3号竪穴住居跡と重複しており、本土坑の方が古い。

[断面形] 底面は比較的平坦で、壁面は直立気味に立ち上がる。第3号竪穴住居跡の覆土は本土坑の覆土を切って堆積している。底面ほぼ中央には直径15cm程の小穴が25cmほど穿たれてい る。落し穴の底面に打ち込まれた棒杭の痕跡である可能性が考えられる。

[規模] 確認面での口径は約80cm、底径は約70cm、確認面から底面までの深さは約90cmである。本土坑及び重複する第3号竪穴住居跡付近の黒色土の削平状況から判断して、落し穴使用時の地表面は造構確認面より上位にあったのは確実である。従って、本来的な口径は、確認面でのそれより若干大きくなるものと思われる。

[堆積土] 自然堆積と思われる。

[遺物] 土器は出土していないが、石匙と礫が出土している。出土位置はともに南西壁際の覆土中である。

[時期] 造構の新旧関係から第3号竪穴住居跡構築以前、即ち縄文時代前期中葉以前の落し穴と思われる。

#### 第3号土坑(図5・10)

[位置] 第4号竪穴住居跡の隣接地、D-21グリッドで確認されている。確認面での標高は約24.8mである。

[平面形] いびつな円形である。重複は無い。

[断面形] 底面には緩い傾斜があり、北東方向の壁面はほぼ直立し、他は緩やかに傾斜して立ち上がる。

[規模] 確認面での大きさは径80×深さ17cmである。

[堆積土] 焼土、炭化物が主体である。

[遺物] 土師器甕が出土している。

[時期] 平安時代と思われる。第4号竪穴住居跡の付随施設であった可能性も考えられる。

#### 第4号土坑(図5・10)

[位置] D-21グリッドで確認されている。確認面の標高は約24.8mである。

[平面形] いびつな円形である。重複は無い。

- [断面形] 底面に若干の起伏があり、壁は緩く外傾して立ち上がる。
- [規模] 確認面での大きさは径80×深さ14cmである。
- [堆積土] 自然堆積と思われる。
- [遺物] 繩文時代後期のものと思われる土器片が2点出土した。どちらも焼成堅緻で、地文の節は細かい。
- [時期] 出土遺物から縄文時代後期のものと考えることもできるが、本土坑に本来的に伴ったものではない可能性も残る。

#### 第5号土坑(図5)

- [位置] G-18グリッドで確認されている。確認面の標高は約23.4mである。
- [平面形] ほぼ円形である。重複はない。
- [断面形] 底面は比較的平坦で、壁面はほぼ直立して立ち上がる。
- [規模] 確認面での大きさは径99×深さ30cmである。
- [堆積土] 自然堆積と思われる。
- [遺物] 出土していない。
- [時期] 構築時期は不詳である。

#### 第6号土坑(図5)

- [位置] F-15グリッドで確認されている。確認面の標高は約21.8mである。
- [平面形] ほぼ円形である。重複はない。
- [断面形] 底面は比較的平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。
- [規模] 確認面での大きさは径100×深さ20cmである。
- [堆積土] 焼土が混入している。
- [遺物] 出土していない。
- [時期] 構築時期は不詳である。

(太田原潤・齋藤由美子・土岐耕司)

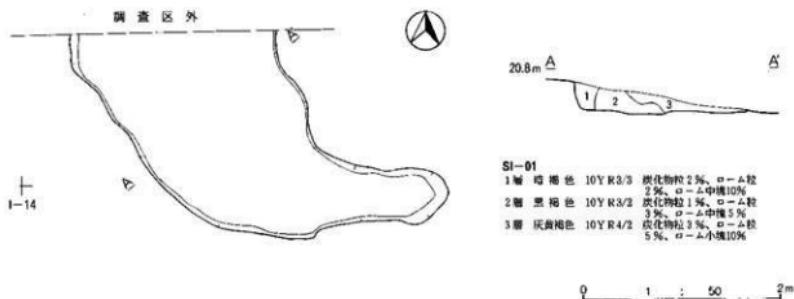


図3 第1号竖穴住居跡

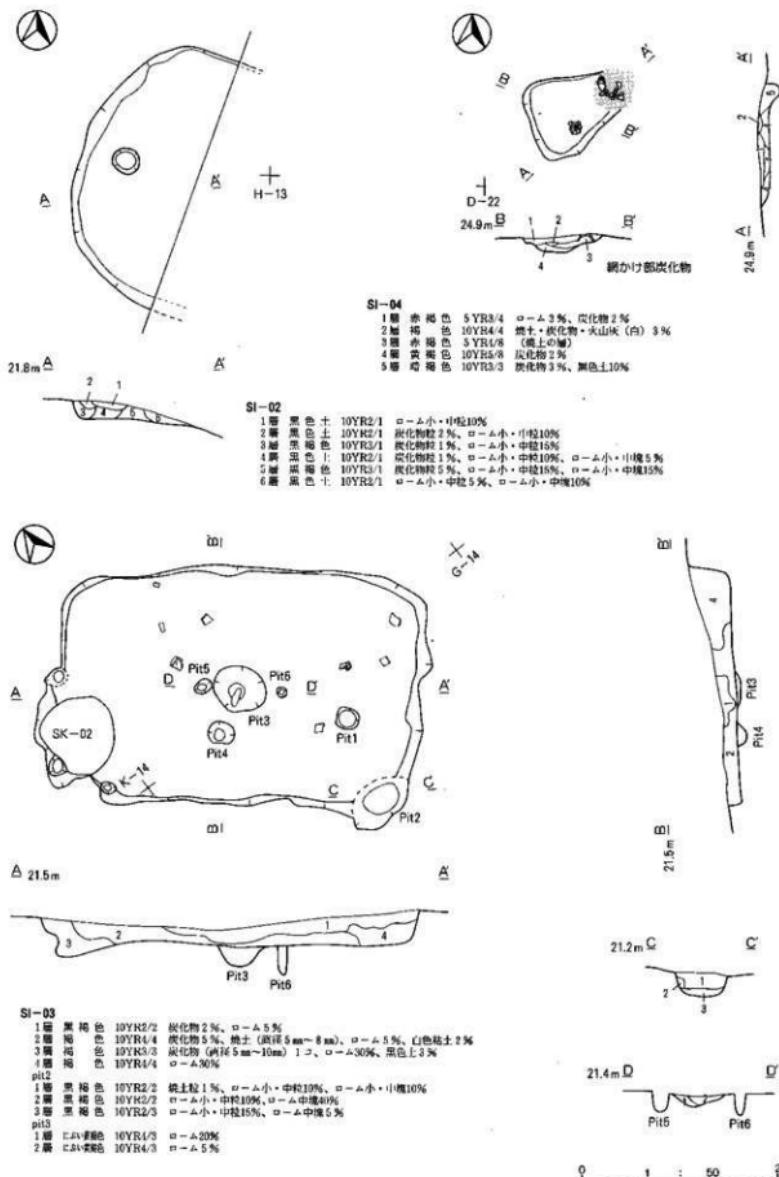


図4 第2～4号堅穴住居跡

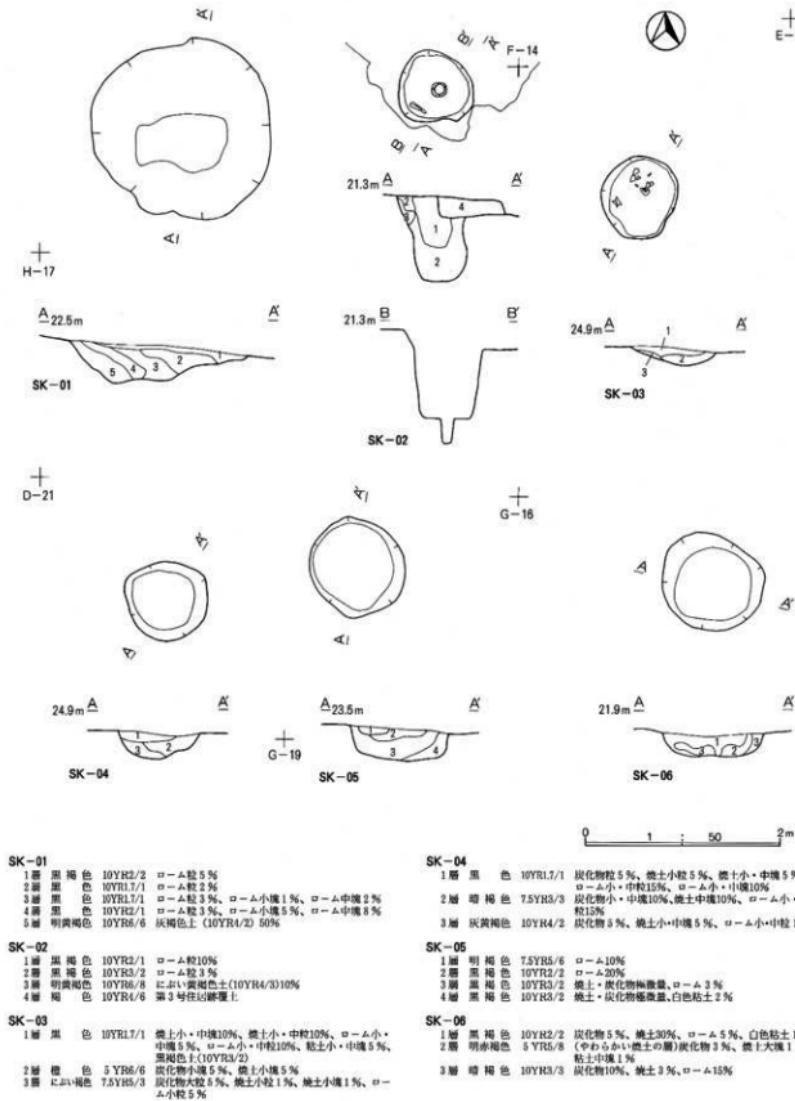
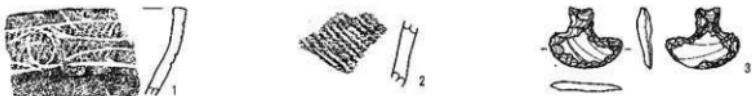


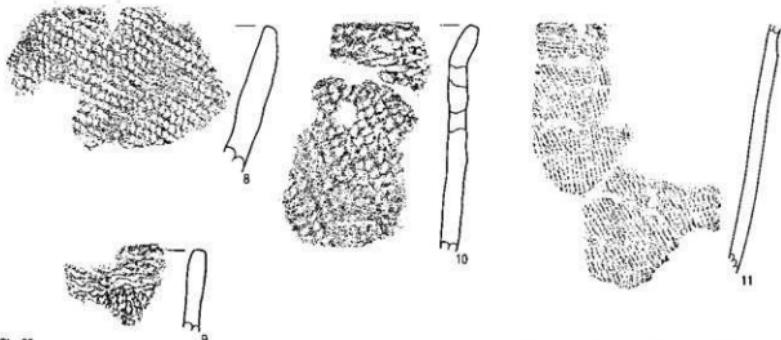
図5 第1～6号土坑



SI-01



SI-02



SI-03

0 1 2.5 10cm

図6 造構内出土遺物 (SI-01~03)

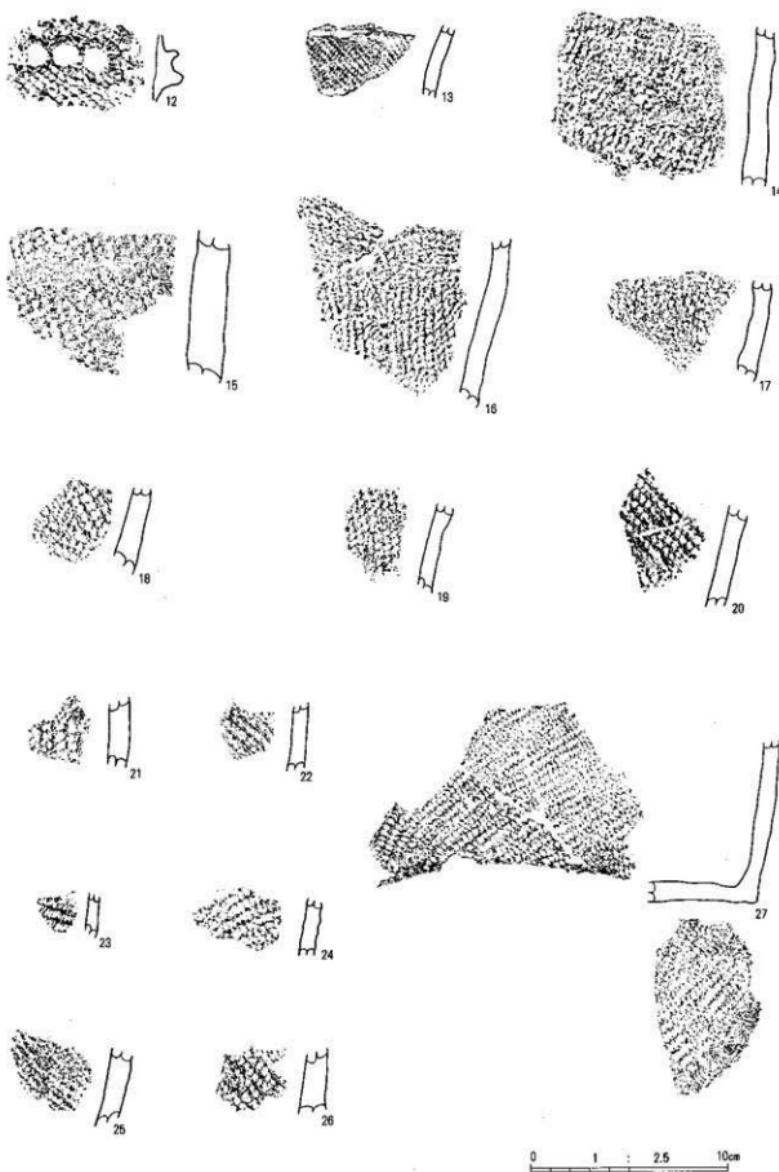


図7 遺構内出土遺物 (SI-03)

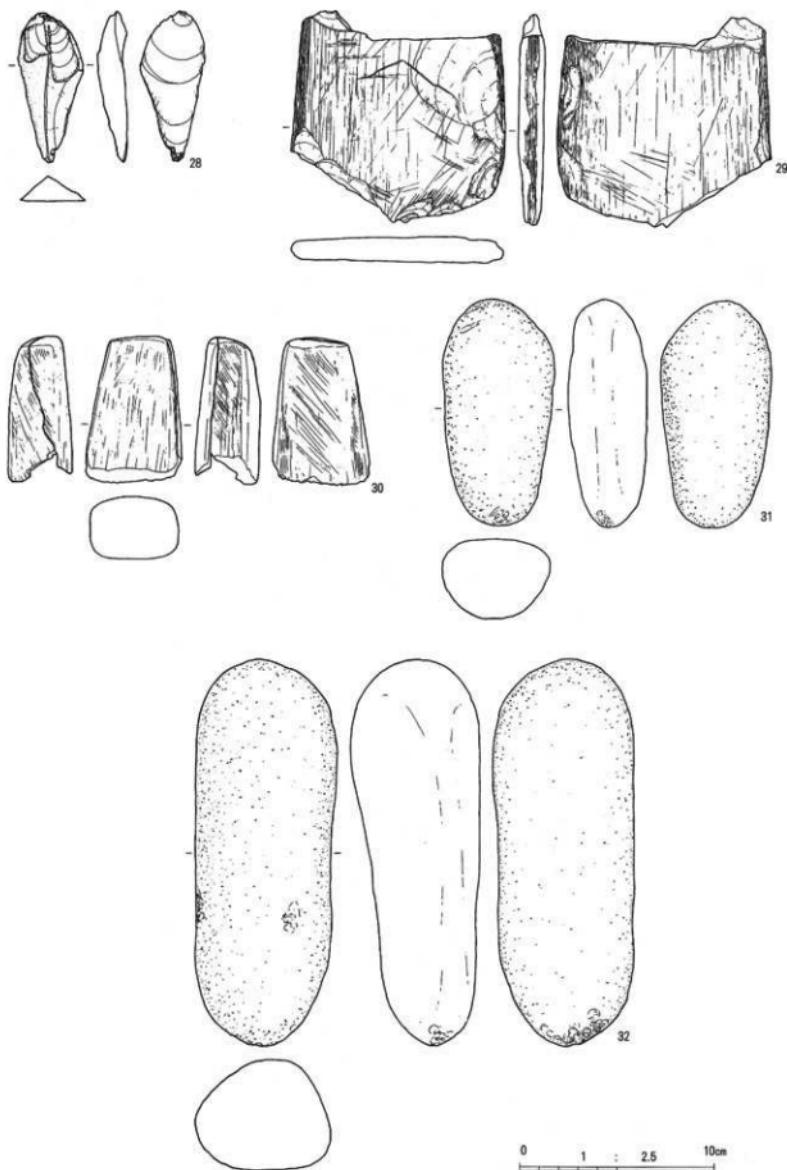


図8 遺構内出土遺物 (SI-03石器)

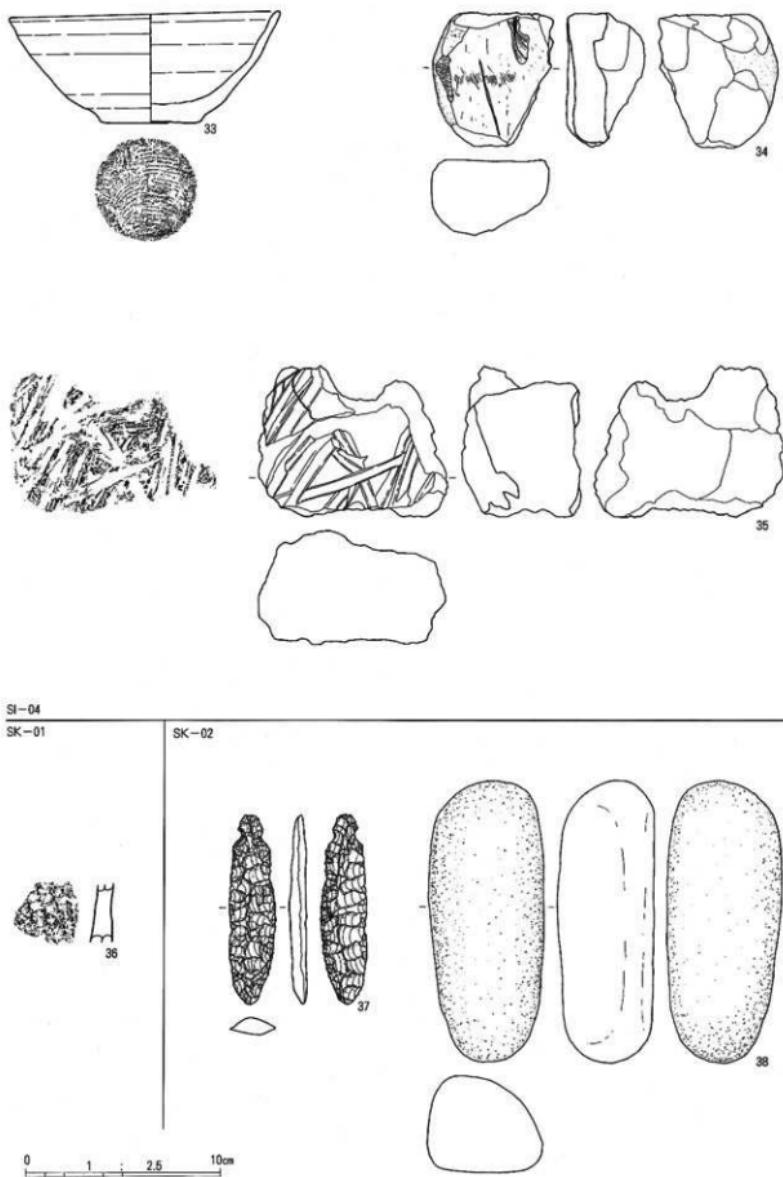


図9 造構内出土遺物 (SI-04、SK-01・02)

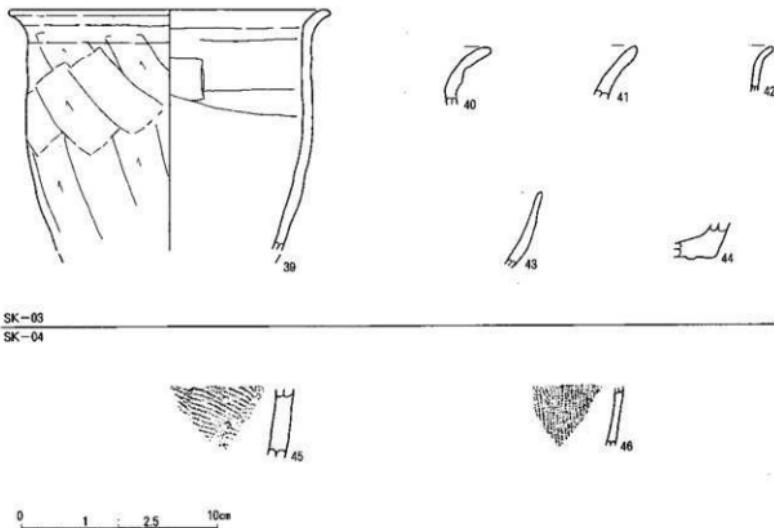


図10 遺構内出土遺物 (SK-03・04)

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 1 土器

土器の出土量は少なく、器形が復元できるものもないが、時期的には縄文時代前期、中期、後期と弥生時代のものが出土している。分類上5群に大別し、縄文時代前期を第I群、中期を第II群、後期前半を第III群、後期後半を第IV群、弥生時代を第V群とした。

##### 第I群土器（図11-1～13）

1の口縁部文様帶には、上下を結束回転文及び側面圧痕文で挟まれた横位の貼付がみられる。貼付上には口唇直下・胸部と同じR L R回転文が施され、更にその上から丸みを帯びた板状工具による刺突が一定の間隔で施されている。また、口唇面には間隔のあいた斜位の側面圧痕文が施されている。2の貼付上にみられる刻みは指先でつまんで形作られている。3の口縁部文様帶には結束回転文、4には工具による横位の押し引き、5には側面圧痕文がみられる。4の口唇部内側は、面取りされたためか角張っている。本群土器は円筒下層a・b式に比定される。

##### 第II群土器（図11-14～16）

3点のみの出土である。14は、口縁部に側面圧痕文を施した粘土紐を蛇行させて貼り付けている。文様帶には側面圧痕文・結束第1種・横位の結節回転文がみられる。円筒上層a～c式期のものと思われる。15は波状を呈するものと思われ、突起部分に横位に細い粘土紐を貼り付けている。地文はR L斜縄文である。円筒上層d式に比定される。16には明瞭で太い沈線で描き出された「U」字状の磨消文がみられ、大木10式併行期のものと思われる。

##### 第III群土器（図12-13-17～43）

施文の相違により以下のように細分した。

###### 〔第III群1類〕（17～21）

無文地に沈線を施したものの一括した。17・18は同一個体で、文様構成は隆線と沈線から成り、最大径部分にも横位隆線が伴うものと思われる。19はやや波状を呈する浅鉢形土器で、破損はしているが、縦の貫通孔をもつ貼付がみられる。沈線は一筆書きではなく、太さも一定でない。20の文様は、他に比べると非常に浅い沈線で網目状に施されている。

###### 〔第III群2類〕（22～40）

縄文と沈線で文様を施したものの一括した。本類の地文は原体を縦方向に転がしたものが多くみられる。22～24は波状口縁に沿って沈線が施されている。22の口唇部には原体の縄尻と思われるものの圧痕が施される。23の肥厚させた口縁には光填文が施され、細い管状の工具で真ん中に刺突をした円形の貼付がみられる。25～27の口唇直下は無文で、横位平行沈線を施すことによって下部の文様帶を区画している。28の地文は、この類では例外的に単軸絡条体回転文である。

###### 〔第III群3類〕（41～43）

縄文のみを施したものの一括した。但し、細片のため2類のものとの判別が難しいものもある。43は単軸絡条体で網目状文を施している。

##### 第IV群土器（図13-44）

羽状縄文を施文後、沈線、磨り消しにより玉抱三叉文を描出している。第2号住居跡出土遺物と同

一固体と思われる。

#### 第V群土器 (図13-45)

1点のみの出土である。文様帶を区画する横位平行沈線の上部に磨消文が施される胸部破片で、磨消部分は菱形状である。土器外面には炭化物が付着する。

(土岐 耕司)

## 2 石器

#### 石鎌 (図14-1~3)

3点出土している。3は先端部が欠損しているが他は完形である。基部の形状はそれぞれ異なる。2の基部にはアスファルト状の黒色物質が付着している。

#### 石棒 (図14-4)

1点のみ出土している。上下両端で欠損している上、片面側は節理面で剥落しているため全体の形状は不明であるが、加工の状態から石棒の可能性を考えた。残存した部位には整形のためと思われる擦痕が観察される。

#### 石斧 (図14-5~6)

2点出土している。5は完形の石斧であるが、非常に小型である。技法的には擦りきりにより製作されたものと思われる。6は刃部のみの破片で基部側は大きく欠損している。丁寧に研磨されてはいるが、それに先行する剥離面の痕跡も残存していることから、硬質ハンマーによる直接打撃である程度整形した後研磨したものと思われる。

#### 磨り石 (図14-7)

1点出土している。全面自然面で、特に加工することなく自然礫の比較的平坦な面を磨り面としたようである。

#### 石核 (図14-8~9)

2点出土している。8は打面を転移しながら、石器の素材となりうる剥片を剥離した石核である。9は石器の素材となりうるほどの大きさの剥片は剥離していないが、珪質頁岩の転石に数回の剥離を施した痕跡がみられるものである。

#### 二次加工ある剥片 (図14~15-10~17)

剥片のいずれかの部位に二次加工が見られる剥片を一括した。10は剥片の表裏に渡って二次加工がみられるが、他は主要剥離面側から図の表面側に対して施された二次加工が大半である。11・12の二次加工は打面を除くほぼ全周に及ぶが、他は部分的なものが多い。13には使用痕状の刃こぼれも観察される。

(太田原 潤)

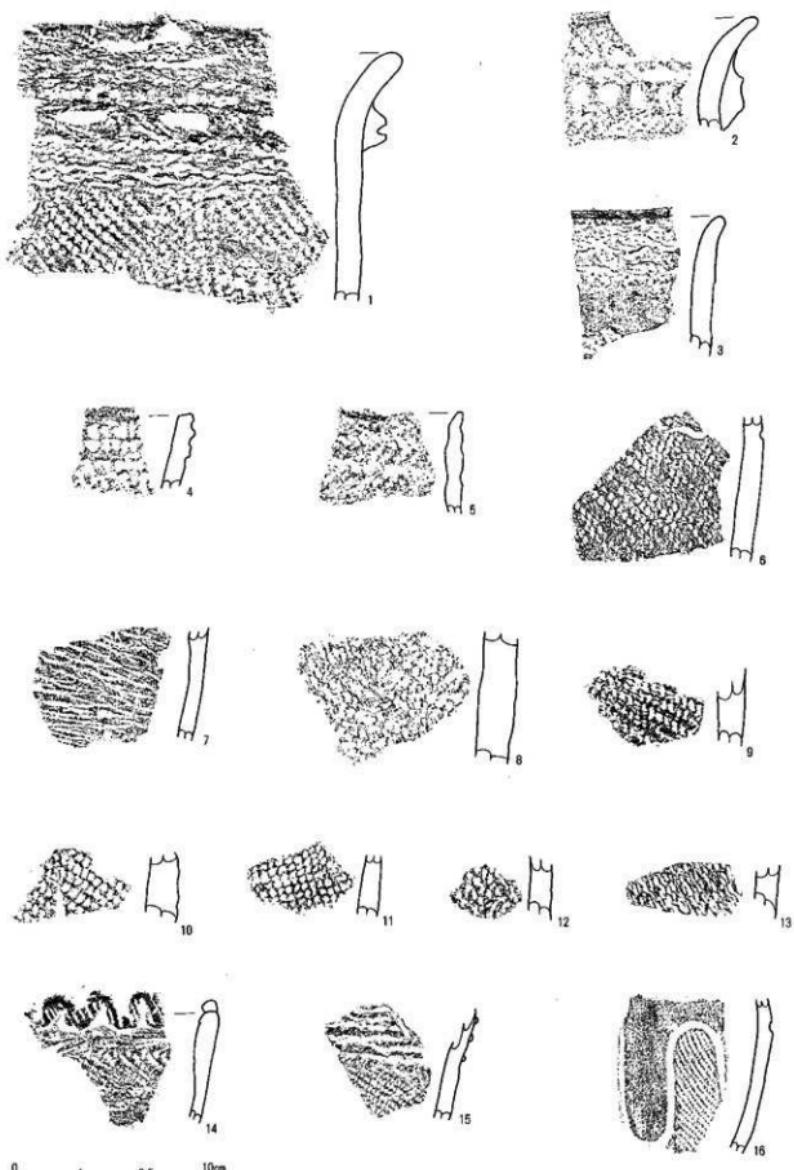


図11 造構外出土土器（1）

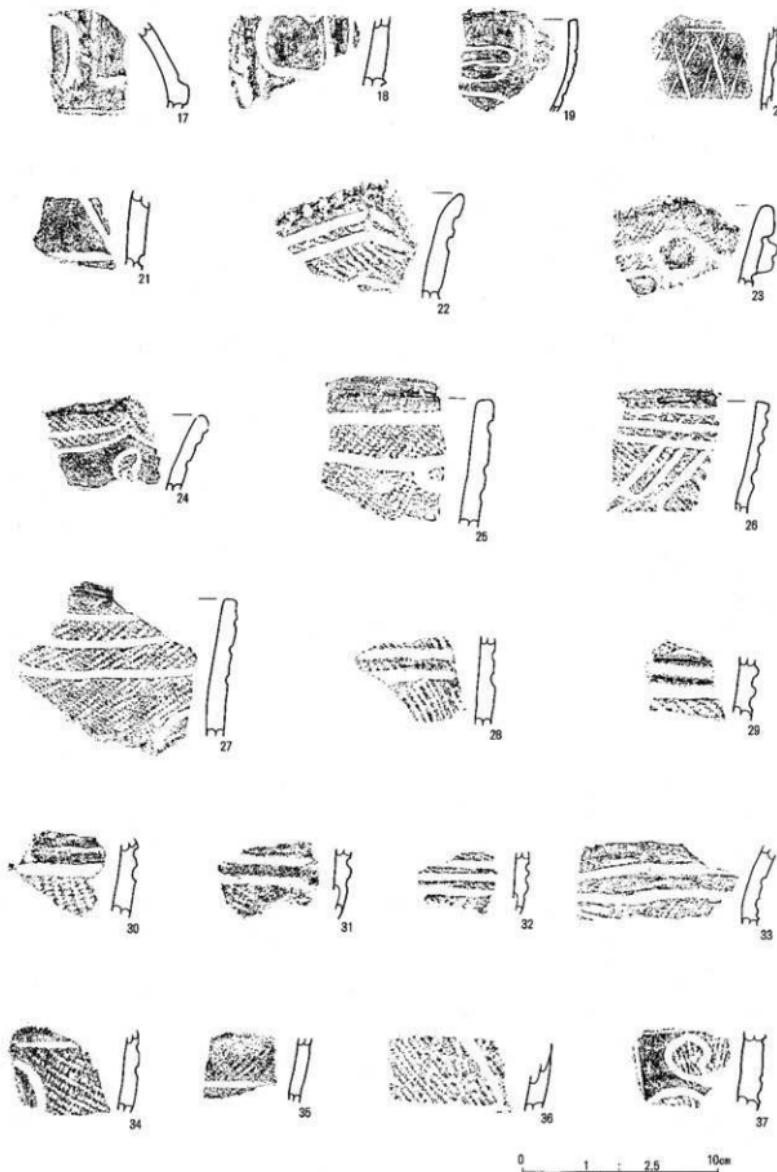


図12 遺構外出土土器（2）

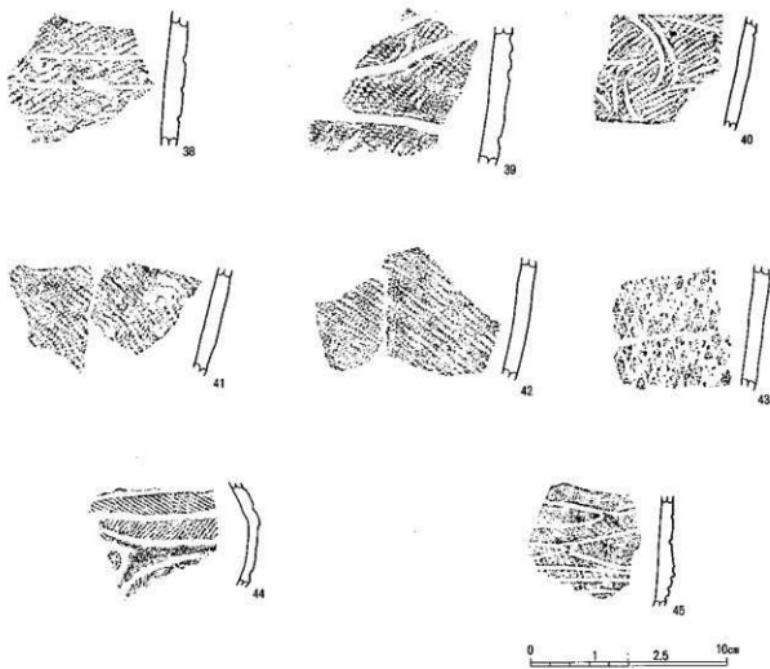


図13 遺構外出土土器（3）

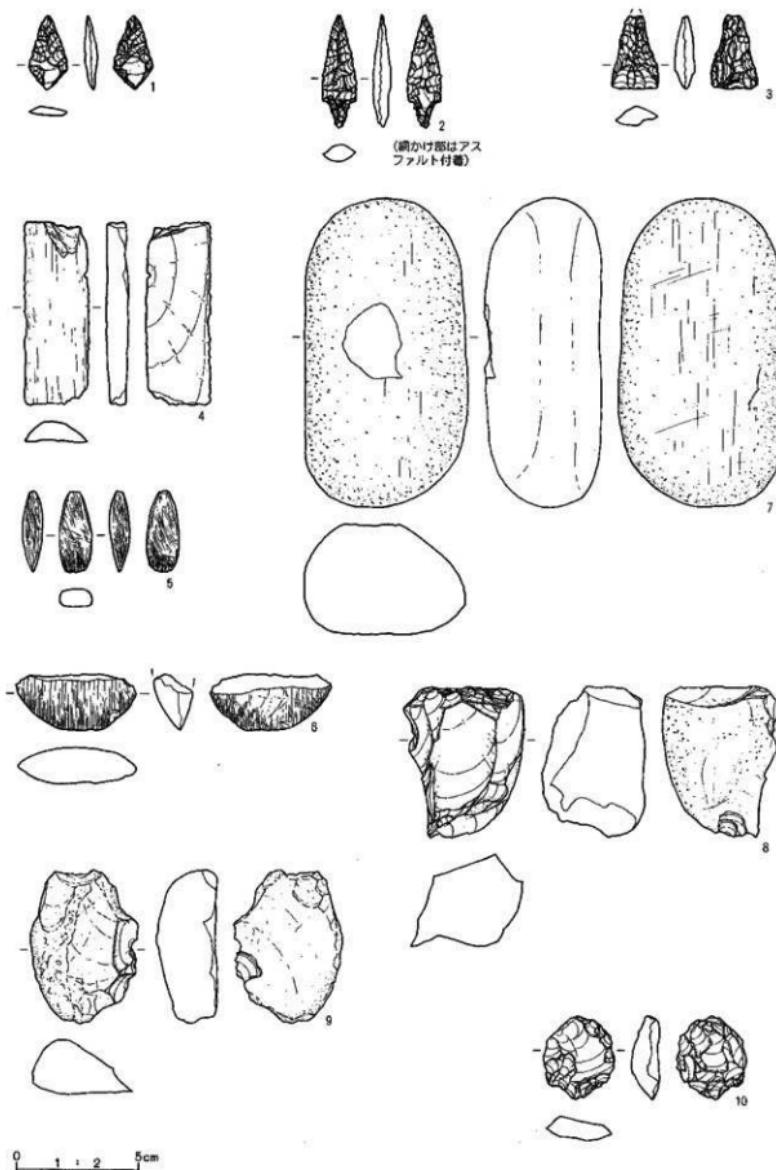


図14 造構外出土石器 (1)

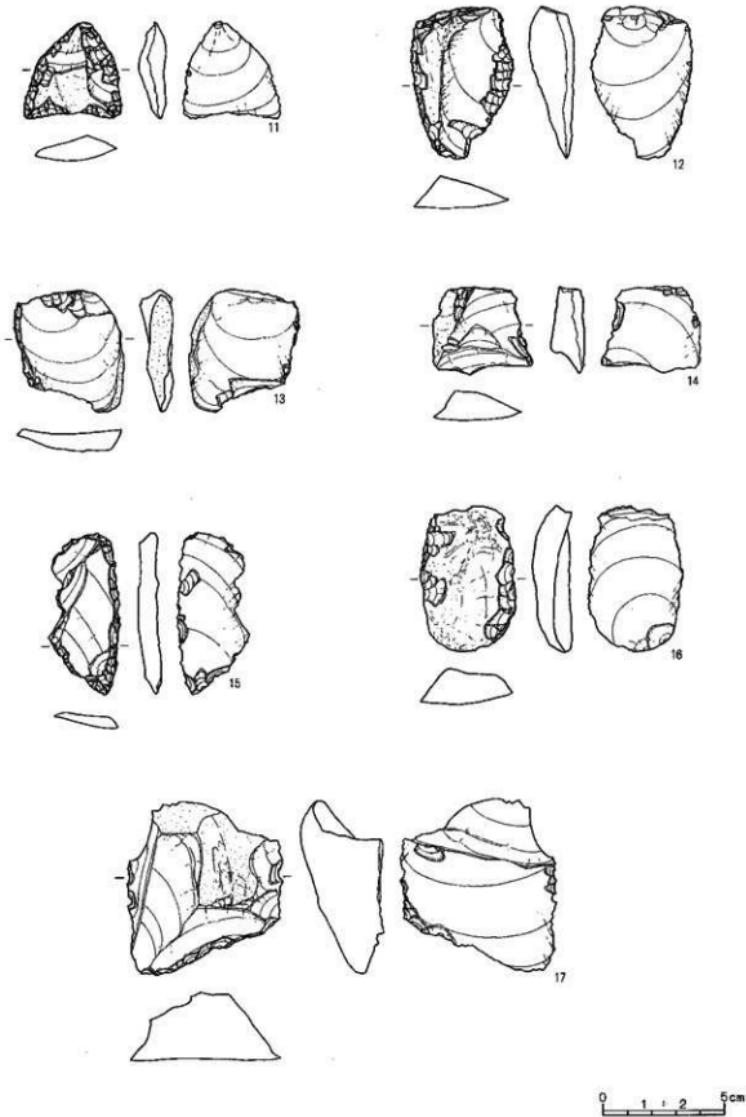


図15 遺構外出土石器（2）

表2 遺構内出土縄文土器

辨図	番号	遺構	層位	文	様	内面調整	炭化物	分類	備考
図6	1	SI-01	覆土	玉造三叉文(LR、沈線、磨消)	ナデ	外面	IV		
図6	2	SI-01	覆土	LR斜回転	ミガキ			II・IV	
図6	4	SI-02	覆土	突起、LR・RL、沈線、磨消	ミガキ		IV		図6-5・6、図13-44と同一個体、砂粒混入
図6	5	SI-02	覆土	LR・RL、沈線、磨消	ミガキ		IV		砂粒混入
図6	6	SI-02	覆土	RL、沈線、磨消	ミガキ		IV		砂粒混入
図6	7	SI-02	覆土	RLR	ナデ		I?		
図6	8	SI-03	覆土	RLR	ナデ、ミガキ		I		織維混入
図6	9	SI-03	覆土	R結回、RLR斜回転	ナデ		I		砂粒混入
図6	10	SI-03	覆土	R結回?、RLR、補修孔	ナデ		I		織維・砂粒混入
図6	11	SI-03	覆土	LR單格1	ナデ	外面	I		織維混入
図7	12	SI-03	覆土	斜突、RLR斜回転	-		I		剥落した貼付部
図7	13	SI-03	覆土	沈線、LR斜回転	ミガキ	外面	III・IV		
図7	14	SI-03	床底	RLR斜回転	ナデ		I		
図7	15	SI-03	覆土	圓文(摩滅)	ナデ		I		織維・砂粒混入
図7	16	SI-03	覆土	RLR斜回転	ナデ、ミガキ		I		
図7	17	SI-03	覆土	LR單格1?	ナデ		I		織維・砂粒混入
図7	18	SI-03	覆土	RLR	ナデ	外面	I		砂粒混入
図7	19	SI-03	覆土	L單格1	ナデ		I		砂粒混入
図7	20	SI-03	覆土	RLR	ミガキ		I		
図7	21	SI-03	覆土	RLR	ナデ		I		
図7	22	SI-03	覆土	RLR?	ミガキ		I		織維・砂粒混入
図7	23	SI-03	覆土	LR斜回転?	ミガキ		I		砂粒混入
図7	24	SI-03	覆土	LR	ナデ		I		砂粒混入
図7	25	SI-03	覆土	RLR	ナデ		I		織維混入
図7	26	SI-03	覆土	RLR	ナデ	外面	I		
図7	27	SI-03	覆土	LR、底板RLR	ナデ	外面	I		織維混入
図9	36	SK-01	覆土	RL?	ナデ		I		織維混入
図10	45	SK-04	覆土	LR斜回転	ナデ		III・IV		砂粒混入
図10	46	SK-04	覆土	LR斜回転	ミガキ	外面	III・IV		

表3 遺構内出土石器

辨図	番号	器種	石質	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
図6	3	石匙	チャート	SI-01	3.1	3.8	0.8	5.3	覆土
図8	28	使用痕ある剥片	珪質頁岩	SI-03	7.7	3.4	1.5	23.7	覆土
図8	29	擦りきり具	粘板岩	SI-03	10.8	11.1	1.3	206.0	覆土
図8	30	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	SI-03	7.5	5.0	3.3	216.7	床面直上
図8	31	叩き石	凝灰岩	SI-03	11.7	5.8	4.1	346.9	覆土
図8	32	叩き石	凝灰岩	SI-03	20.7	7.3	6.7	1248.4	覆土
図9	34	砥石	凝灰岩	SI-04	6.9	6.2	4.0	211.9	カマド
図9	37	石匙	珪質頁岩	SK-02	9.7	2.4	0.9	18.3	覆土
図9	38	礫	流紋岩	SK-02	14.5	5.9	5.0	652.1	覆土

表4 遺構外出土繩文土器

編図	番号	出土地点	肩位	文 様	内面調整	炭化物	分類	備 考
図11	1	G-15	I	口唇、LR直痕、RLR直痕、R結回、貼付（刺突、RLR）、RLR	ナデ、ミガキ		I	織維混入、風倒木
図11	2	D-16	II	LR直痕、貼付（つまみによる刺み）、LR	ミガキ		I	砂粒混入
図11	3	F-14	I	LR結回、貼付（剥落）	ナデ、ミガキ		I	
図11	4	H-22	I	刺突、RL	ナデ		I	
図11	5	E-16	II	RLR直痕、RLR	ナデ		I	織維・砂粒混入
図11	6	G-15	I	R結回、RLR	ナデ		I	織維混入、風倒木
図11	7	E-16	II	R單縫 1 横回転	ナデ		I	織維・砂粒混入
図11	8	E-16	I	LR?	ナデ		I	織維混入
図11	9	G-15	I	RLR	ナデ		I	織維混入、風倒木
図11	10	I-21	I	RLR	ナデ		I	織維混入
図11	11	G-15	I	RLR斜回転	ナデ		I	織維・砂粒混入、風倒木
図11	12	G-15	I	RL	ミガキ		I	風倒木
図11	13	G-15	I	RLR	ナデ		I	風倒木
図11	14	H-23	I	L+RL直痕、貼付（L直痕）、結果第1種、R結回	ナデ	外面	II	
図11	15	H-23	I	貼付、RL	ナデ		II	
図11	16	D-25	I	LR縦回転、沈線、磨消	ナデ		II	内面黒色
図12	17	D-25	I	隆線、沈線	ミガキ		III-1	18と同一個体
図12	18	D-25	I	隆線、沈線	ミガキ		III-1	
図12	19	H-20	I	沈線、貼付（縫の貫通孔、破損）	ミガキ		III-1	
図12	20	D-25	I	沈線	ナデ		III-1	
図12	21	H-22	I	沈線	ナデ		III-1	
図12	22	F-23	I	口唇刻み、LR縦回転、沈線	ミガキ		III-2	
図12	23	B-22	I	口縫肥厚、円形貼付（円形刺突）、LR	ナデ		III-2	
図12	24	H-23	I	RL充満、沈線	ミガキ	内外面	III-2	
図12	25	I-21	I	RL縦回転、沈線	ミガキ		III-2	
図12	26	F-24	I	LR縦回転、沈線	ナデ		III-2	
図12	27	H-22	I	RL縦回転、沈線	ミガキ		III-2	
図12	28	F-23	I	R單縫 1、沈線	ミガキ		III-2	
図12	29	H-22	I	LR縦回転、沈線	ミガキ		III-2	30と同一個体
図12	30	H-23	I	LR縦回転、沈線	ミガキ		III-2	
図12	31	H-22	I	LR縦回転、沈線	ミガキ		III-2	
図12	32	H-22	I	LR縦回転、沈線	ナデ		III-2	
図12	33	H-23	I	RL縦回転、沈線、磨消	ナデ	外面	III-2	
図12	34	H-22	I	LR縦回転、沈線	ミガキ	外面	III-2	
図12	35	G-15	I	RL縦回転	ナデ		III-2	風倒木
図12	36	H-23	I	LR縦回転、沈線、R結回	ナデ	外面	III-2	
図12	37	H-22	I	RL、沈線、磨消	ミガキ		III-2	
図13	38	H-17	I	RL縦回転、沈線	ミガキ		III-2	
図13	39	D-25	I	RL縦回転、沈線	ミガキ	外面	III-2	
図13	40	G-15	I	LR、沈線	ナデ	外面	III-2	組倒木
図13	41	F-23	I	LR縦回転	ミガキ	内外面	III-3	
図13	42	H-23	I	LR縦回転	ナデ	外面	III-3	
図13	43	D-25	I	L單縫 5	ナデ	内面	III-3	砂粒混入
図13	44	I-21	I	玉抱三叉文？(RL、沈線、磨消)	ミガキ		IV	図6-4～6と同一個体、砂粒混入
図13	45	D-25	I	LR縦回転、沈線、磨消	ナデ	外面	V	

表5 遺構外出土石器

件名	番号	器種	石質	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
岡14	1	石礫	珪質頁岩	II-21	3.0	1.6	0.5	1.4	
岡14	2	石礫	流紋岩	D-25	4.6	1.4	0.7	3.4	基部アスファルト付着
岡14	3	石礫	珪質頁岩	F-14	3.0	1.9	0.8	3.4	先端部欠損
岡14	4	石棒	頁岩	D-25	7.5	2.7	0.9	25.7	両端欠損
岡14	5	石斧	褐色細粒凝灰岩	D-24	3.3	1.4	0.8	5.2	
岡14	6	石斧	砂岩	G-14	2.4	6.0	1.5	18.1	刃部のみ
岡14	7	磨り石	流紋岩	G-23	12.7	6.7	4.8	536.2	白抜き部はガジリ
岡14	8	二次加工有る剥片	珪質頁岩	F-23	6.2	5.0	4.2	139.0	
岡14	9	二次加工有る剥片	珪質頁岩	H-19	6.3	4.5	2.5	78.7	
岡14	10	二次加工有る剥片	珪質頁岩	H-21	3.4	2.9	1.1	10.7	
岡15	11	二次加工有る剥片	珪質頁岩	H-19	6.6	3.0	0.9	12.3	
岡15	12	二次加工有る剥片	珪質頁岩	F-23	6.2	4.2	1.8	34.4	
岡15	13	二次加工有る剥片	珪質頁岩	H-21	5.0	4.5	1.3	22.0	
岡15	14	二次加工有る剥片	珪質頁岩	D-22	3.6	4.1	1.4	19.4	
岡15	15	二次加工有る剥片	珪質頁岩	H-19	4.0	4.0	1.1	15.4	
岡15	16	二次加工有る剥片	珪質頁岩	II-24	6.0	3.9	1.6	41.7	
岡15	17	二次加工有る剥片	珪質頁岩	H-16	7.1	6.4	3.4	104.1	

表6 遺構内出土土器(平安時代)

件名	番号	遺構	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
岡9	33	SI-04	土師器	壺	14.0	5.5	5.3	底部口縁糸切、細砂粒混入顯著
岡9	35	SI-04	壁材?	-	-	5.7(厚さ)	-	織維・砂粒混入。何かの炉壁?
岡10	39	SK-03	土師器	壺	16.5	-	-	口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ、粗砂粒混入顯著
岡10	40	SK-03	土師器	壺	-	-	-	口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ、砂粒混入顯著
岡10	41	SK-03	土師器	壺	-	-	-	口縁部横ナデ、砂粒混入顯著
岡10	42	SK-03	土師器	壺	-	-	-	口縁部横ナデ
岡10	43	SK-03	土師器	壺	-	-	-	細砂粒混入
岡10	44	SK-03	土師器	壺	-	-	-	砂粒混入顯著

## 第4章 考察とまとめ

栄山(3)遺跡から検出された遺構を時期別に見ると、次のとおりである。

縄文時代前期以前	土坑 1基
縄文時代前期	土坑 1基、竪穴住居跡 1件
縄文時代後期	土坑 1基、竪穴住居跡 2件
平安時代	土坑 1基、竪穴住居跡 1件
時期不詳	土坑 2基

遺物は少ないながらも複数の時期のものが出土している。縄文時代前期、中期、後期と弥生時代、平安時代の各期が識別されているが、最も多いのは縄文時代後期のものである。遺構内、遺構外で比べてみると、縄文時代前期の遺物は遺構の内外ともほぼ同じ時期のものであるが、後期の遺物は、後期前半のものが遺構外に多いに対し、後期後半のものは遺構内に多い傾向を示す。第2章第2節でみたように、周辺の縄文時代遺跡は前期から後期にかけてのものが多く、本遺跡もその時期の人間の活動領域中にあったものと思われる。

これらの中で特に注目すべき遺構としては、落し穴と推定される土坑が挙げられる。土坑を落し穴と認定するにはそれなりの根拠が必要であろうが、第2号土坑では底面中央に小穴が認められ、それが落し穴底面に打ち込まれた棒杭の痕跡と考えられた。八戸市鶴窪遺跡等に類例が求められるため、そのように認定したものである。

土坑内部から出土した遺物がその落し穴の構築及び使用時期を示すとは必ずしも限らないので、落し穴の時期を特定するのは概して困難であるが、第2号土坑の場合は他の遺構との切り合い関係によりある程度時期が限定できた。第3号竪穴住居跡は縄文時代前期中葉のものと推定されるが、第2号土坑が埋積しきった後に、その堆積土を掘削して構築したものであることが土層断面の観察から判明している。これは、第2号土坑が落し穴として使用されたのは少なくとも縄文時代前期中葉以前に限定されることを示唆するものと言える。どこまで遡るかは明確ではないが、土坑内から出土した石器の時期が参考になる。出土した定型的な石器は石匙1点のみであるが、両面加工が特徴的である。縦型の石匙が安定的に出土するのは県内では縄文時代早期以後であるが、石器組成中に高い割合で占めるのは円筒土器文化期であり、周辺の三内丸山遺跡、熊沢遺跡からも多量の石匙を出土している。それらの大半は片面加工であり主要剥離面側に対して加工が施されないものが一般的であるが、しばしば両面加工のものもみられる。両面加工のものは、つまみ部とは反対側に尖頭部を作出し、石匙というよりは石槍、石錐状に仕上げられるものが多いが、明瞭な尖頭部が作出されないものも散見される。本遺跡例は、最後者に對比することも可能と思われる。早期にも類似した資料はあるが、遺跡内の遺構、遺物の時期、周辺遺跡の時期等から考えると、そこまで遡らせる積極的根拠は乏しい。これらを総合的に判断すると、第2号土坑の帰属時期は、縄文時代前期前半期の中でも、円筒土器文化初頭以前のものと考えるのが妥当と思われる。

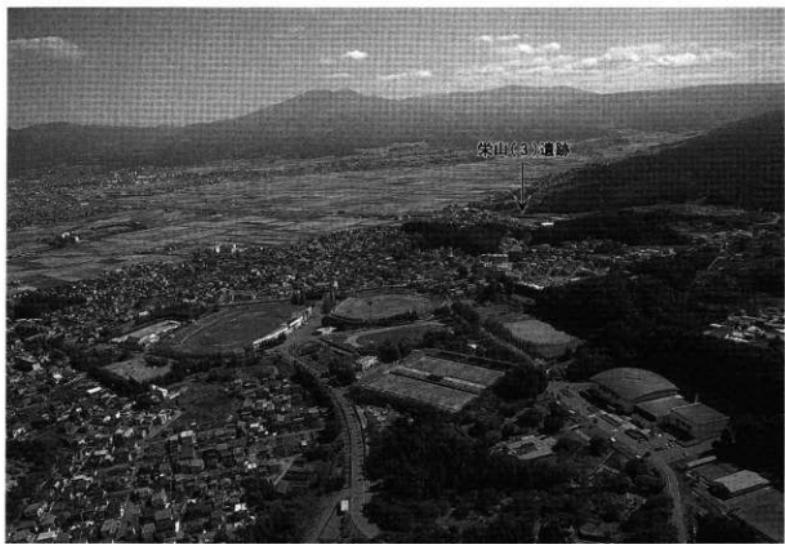
(太田原 潤)

### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1977 『近野遺跡発掘調査報告書Ⅰ・三内丸山(II)遺跡発掘調査報告書』  
青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 青森県教育委員会 1978 『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
- 青森県教育委員会 1980 『鶴塙遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 青森県教育委員会 1994 『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
- 青森県教育委員会 1998 『青森県遺跡地図』
- 青森県教育委員会 1999 『安田(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第255集
- 青森県教育委員会 1999 『三内丸山(6)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
- 青森県教育委員会 2000 『三内丸山(6)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
- 青森市教育委員会 2000 『熊沢遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2000 「朝日山(2)・(3)遺跡」『平成12年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』
- 青森県埋蔵文化財調査センター 2000 「岩渡小谷(4)遺跡」『平成12年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』

# 写 真 図 版





近野遺跡上空から本遺跡を望む



上空から遺跡北西を望む

写真1 空中写真（1）



上空から遺跡北東を望む



上空から遺跡南西を望む

写真2 空中写真（2）



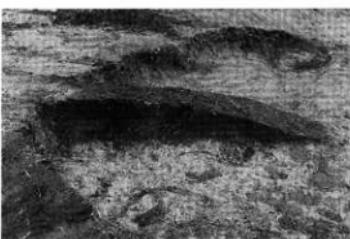
SI-01 平面



SI-01 断面



SI-02 平面



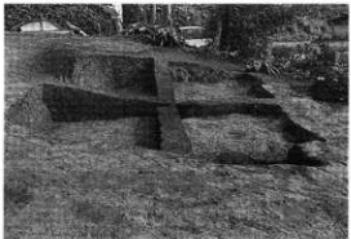
SI-02 断面



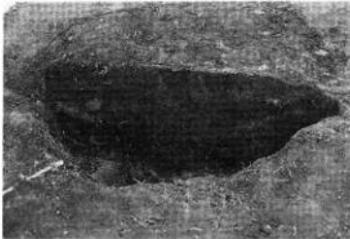
SI-03 平面



SI-03 断面 (南北)



SI-03 断面 (東西)



SI-03 pit2 断面

写真3 遺構写真 (1)



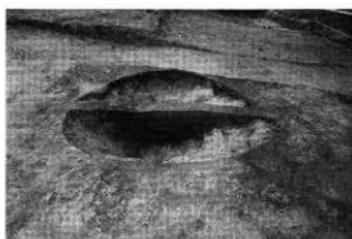
SI-04 平面



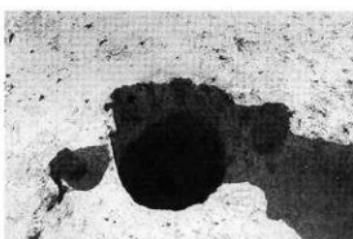
SI-04 断面



SK-01 平面



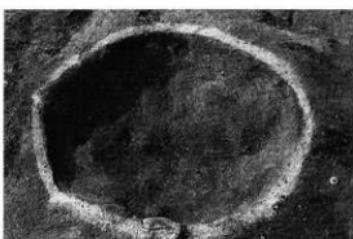
SK-01 断面



SK-02



SK-02とSI-03



SK-03 平面



SK-03 断面

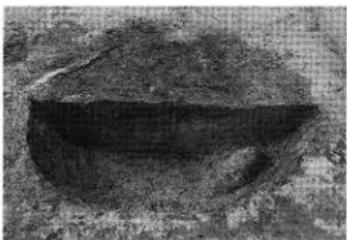
写真4 遺構写真（2）



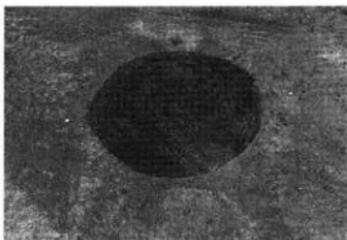
SK-03 遺物出土状態



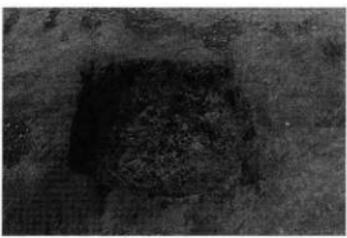
SK-04 平面



SK-04 断面



SK-05 平面



SK-06 平面



SK-06 断面



遺跡全景（調査終了時）



SI-01~03 付近

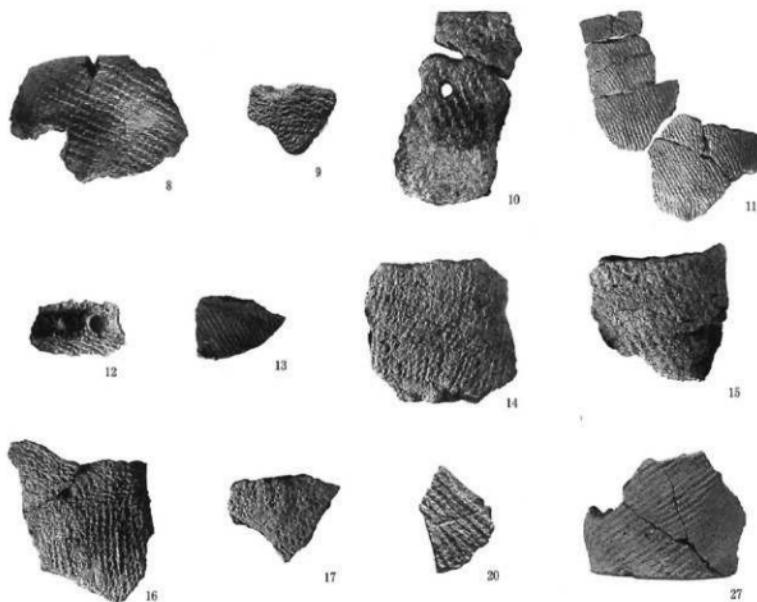
写真5 遺構写真（3）



SI-01



SI-02



SI-03

写真6 遺構内出土遺物（1）



SI-03



SI-04

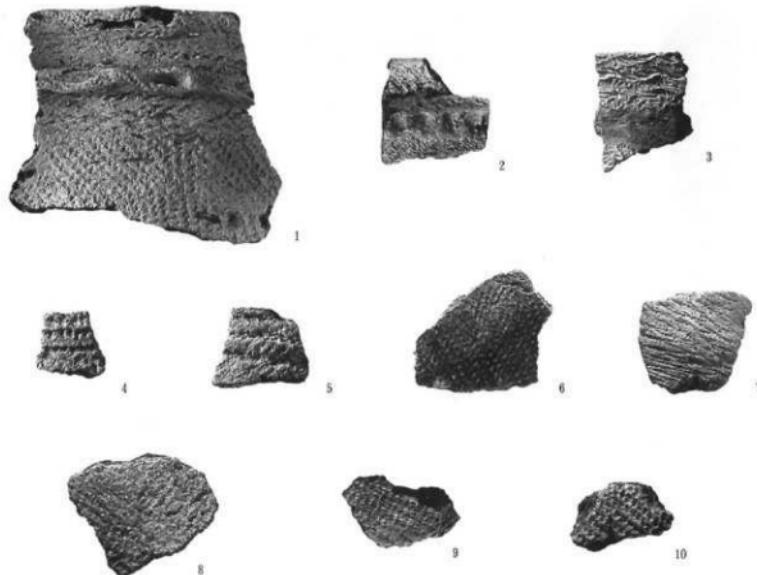


SK-02

SK-04



写真7 造構内出土遺物（2）



第Ⅰ群土器

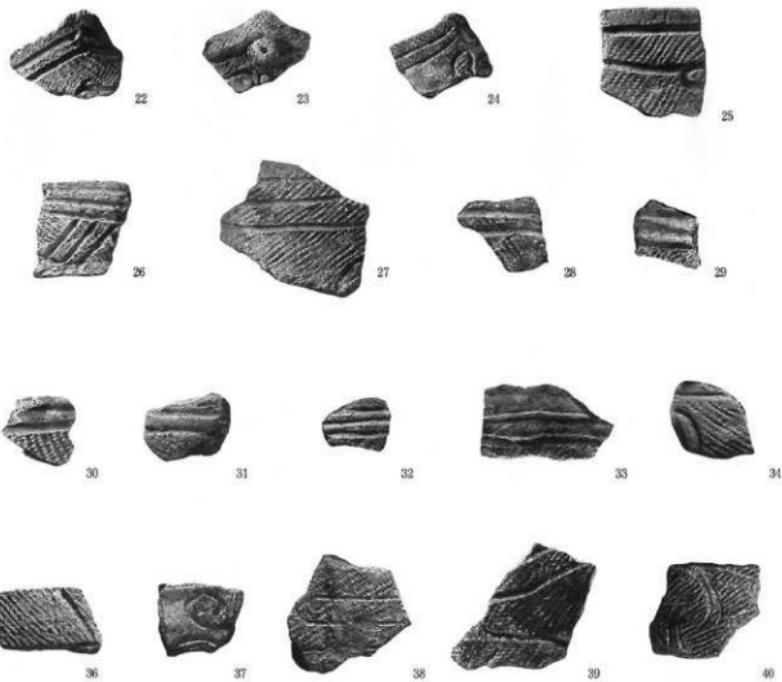


第Ⅱ群土器



第Ⅲ群1類土器

写真8 遺構外出土土器（1）



第III群2類土器



第III群3類土器

第IV群土器



写真 9 遺構外出土土器 (2)



写真10 遗構外出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	さかえやまかっこさんいせき							
書名	栄山(3)遺跡							
副書名	東北縦貫自動車道八戸線(青森~青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第294集							
編著者名	太田原潤・齋藤由美子・土岐耕司							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒030-0042 青森市新城天井内152-15 TEL 017-788-5701							
発行年月日	2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
栄山(3) 遺跡	青森県青森市 細越字木山	02201	01213	40° 47' 40"	140° 42' 57"	19990920 ~ 19991029	1,500	東北縦貫 自動車道 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
栄山(3) 遺跡	散布地	縄文 弥生 平安	竪穴住居跡 土坑	4軒 6基	縄文土器・石器 弥生土器 上師器	土坑の中には縄文時代の落し穴と思われるものが1基含まれる。		



青森県埋蔵文化財調査報告書 第294集

## 栄山(3)遺跡

-東北縦貫自動車道八戸線(青森~青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-

発行年月日 2001年2月28日  
発 行 青森県教育委員会  
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印 刷 所 東奥印刷株式会社  
青森市古川2丁目17-5  
TEL 017-776-5361





活彩あおもり  
—輝くあおもり新時代—